

上伊那音楽教育研究会

# ハーモニー

第5号

令和6年3月13日

文責 橋爪恭子



## 第26回アンサンブル交歓会 in 宮田村民会館

2月10日（土）、雪の残る足元、青空の映る景色の中、アンサンブル交歓会が開催されました。アンサンブル交歓会がスタートした最初の会場であったという宮田村民会館で、コロナも明け20校40チームの参加となりました。各チーム、アカペラ曲を始め個性ある選曲で、子どもたちがそれぞれ練習してきた成果を精一杯発揮しました。生き生きとしたハーモニーにあふれ、素晴らしい一日でした。

この日に向けての練習の中で、少人数でのアンサンブルは、子どもたちが『こう歌いたい』という思いを育てると共に、それを表現する力、聴く力、ハーモニーを感じ取る力など日頃の様々な積み重ねがより必要だと感じ、難しさも感じていました。合唱部には、歌が好きでもっと上手になりたいと熱心に練習する子どももいる一方で、楽しくゆったり練習したいという子、また学校の中で合唱部を自分のひとつの居場所としてとらえている児童もいます。それぞれのメンバーの歌や練習への熱量の違いがある中、『楽しく』『音楽性や技能を高めながら』『一緒に！』一つの目標に向かう為に、悩みつつ自分達なりの方法を考え、相談しながら進めていきました。合唱部の限られた時間の中でそうした様々な思いを包みながらいかに音楽の力を育むか。又、効率的な練習という点についても考える機会となりました。

それでもアンサンブル交歓会という目標に向かうまでの練習の日々は、本当に楽しく充実したもので、何よりステージを存分に楽しむ子どもたちの姿は輝かしく、頼もしく感じました。終了してかわいいういぎのいる庭の近くで「自分たちではどうだった？」と聞くと「楽しかった！」と一斉に笑顔で話す子ども達の表情をみて、私自身も嬉しくなりました。

各学校の素晴らしいアンサンブルを聴くことが出来たことは、子ども達も刺激になり、またとても充実した時間になったようでした。本当にありがとうございました！

審査員の先生方の講評は、毎回今後の課題や参考にさせていただいています。今回も自分に見えていなかった面、指導が十分でなかった面を含め気づきがあり課題をみつめることができました。少人数でのアンサンブルのすばらしさを、これからも学びつつ伝えていきたいと思います。どうもありがとうございました。

## 上伊那音楽教育研究会 総会♪

2月17日（土）、令和5年度の研究会のまとめの総会が箕輪北小学校で行われました。1年間の活動のまとめとして各部より事業報告があり、令和5年度に活動した内容や成果と共に、今後へ繋げる改善事項等も挙げられました。

今年度はコロナ禍も明けて、上伊那音楽教育研究会の先生方を中心とした合唱も復活し、仰望の日に演奏したり数年お休みとなったしわすコンサートも開催され、先生方と一緒に音楽を演奏する喜びをあらためて感じました。数年活動できなかったことが徐々に復活し、また小林みゆき校長先生からお話のあった、「学校の中での音楽の先生の役割はより幅広く重要になっていく」という



小学校の状況もある中で、これから音楽の授業はもちろんのこと、学校内の行事、外部での大会等への取り組みを、子ども達の事を中心に考えながら、どのようにより良い形で進めていくかが重要になってくるように思いました。また清水ひろみ先生から、アンサンブル交歓会の際の審査員をして下さった、指揮者である荒川昌美先生との忌憚のないお話を聞かせていただきました。

「音楽家として、勉強していますか」という問いかけでした。

音楽「科」として教壇に立つだけではなく、音楽「家」としての勉強を続けなければならない。

『指導側が何より音楽を楽しみ、学び、音楽家としても教師としても向上し続ける』ことが必要である。というお話をいただきました。以前、上伊那音楽教育研究会でも長く講習会をして下さっていたという飯沼信義先生に高校時代にお聞きした言葉で、今も心に残っていることがあります。「自分にとっての大切な音を聴き分ける耳をもつこと。」シューマンが言う聴く耳とは、単にすべてを聴き分けるということではなく、聴こえてくる様々な音から「自分にとっての大切な音を聴き分ける耳」ということではないかということでした。未熟ながらも深い言葉だと感じたのを覚えています。大切な音と感ずるにも、色々な音楽や文化に触れたり、視野を広げられるような研修を受ける、また自ら演奏をする中で多くの学びの中で気づきがあり、それは指導にも繋がっていくように思います。

## 冬期講習会♪「音楽科 ICT ワクワク活用講座」小梨貴弘先生

2月17日の総会の後、引き続き冬期講習会が行われました。

これからの日本の教育の大きな流れとして、私たち大人にとっては選択できる価値観であるICTから、子ども達にとってはマストな価値観となり、学校教育の中でも子どもが成長して社会に適應できる人を育てるための環境が加速化していこうという事でした。現在でも変化を実感しているところではありましたが、それでも音楽の授業では実践を中心に行う日々でした。小梨先生は、十分実践や生の楽器の音色の重要性を理解されて、あくまでも『補完的な位置づけ』としてという認識の上でいくつものご提案を示して下さいました。

ICT といっても大仰に捉えず、『鑑賞用に』『シンキング用に』『創作用に』という形で項目によって意識すると分かり易いという事でした。例えば鑑賞の授業では、聴き取ったり感じて言葉にするなども難しい子どもも多い中で、1枚のページに写真を複数載せよりイメージをし易いように具体的に選択肢を提示する、という使用法は、楽しく気軽に授業に取り入れられそうです。また、「堂々たるライオンの行進」の鑑賞であれば、「いったい何の動物？」という問いかけから「ジャムボード」の付箋を使いながら「作者はこう思ったのでは」「ライオンだとするとこういう点が～である。」といった考えの共有や話し合いをするためのツールとして使用し、また、互いの考えを確かめて強化できる「だよね～タイム」を挟むなど、友達と協働しながらの活動はより話し合いも深まっていくとの事でした。「カットカトーン」は創作も含め、大変活用の幅が広いツールでした。説明しても中々理解が深まりにくい「音楽の要素」についても、音楽に苦手意識がある児童にも伝え易くぜひ挑戦してみたいと思っています。他、琴やデジタルピアノ等のアプリもありました。ICT を学習を支援する道具として取り入れていきたいと思っています。

貴重な研修を本当にありがとうございました。

## 1年間ありがとうございました♪

1年間、会報『ハーモニー』をお読みいただき誠にありがとうございました。原稿を書くにあたりご協力いただいた先生方にも心より感謝申し上げます。卒業式を控え、大変忙しい時期ですが、どうかお体にご留意いただきお過ごしください。

